

北海道大分水点の山・三国山へ 音更中の川・六の沢から登る

京極 紘一

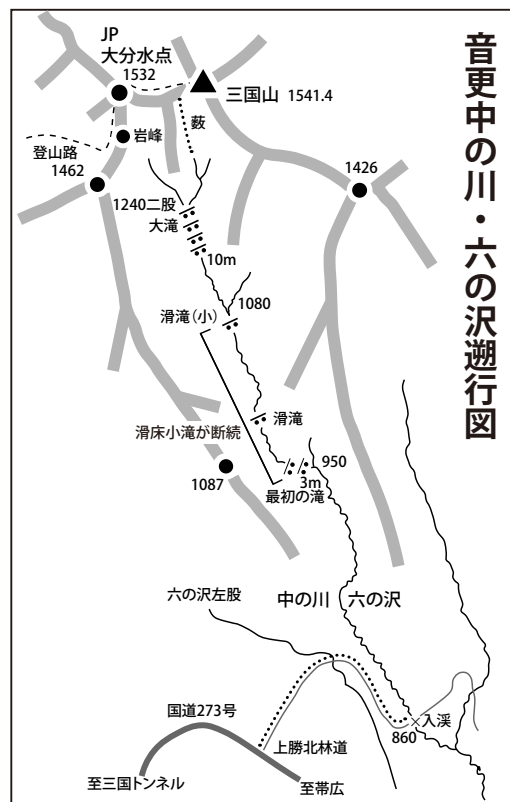
石狩・北見・十勝の境界の山

北海道の屋根といわれる大雪山系の東端に一五四一メートルの三国山がある。山名の由来は明治時代の旧国名で、石狩国と北見国、十勝国の三つの国の境界付近に聳えるところから名付けられた。三国山という山は全国に幾つあるのだろうと思ひ調べたところ、『日本山名辞典』によると一七座もあり、山名の由来はいずれも、三国の国境が交わる所に鎮座することから名付けられたものであり、三国岳の六座を含めると二三座になる。

北海道の三国の正確な境界点は中央分水嶺上（脊梁線）にある一五三二メートルの分岐点ピークになるのだが、そこから三〇〇メートル東にある、少々高い一五四一メートルの山に二等三角点が置かれ、三国山となった。点名は「三国嶺（ミクニトウゲと読む）」である。

そして、本当の三国の境である分岐点ピークは、日本海にそそぐ石狩川と太平洋にそそぐ十勝川、さらにはオホーツク海にそそぐ常呂川の源流であるところから「北海道大分水点」と近年になって名付けられ、国土地理院の地形図にも表記された。この三国山は日本山岳会北海道支部にとつてもなじみ深い山である。支部創立五〇周年記念事業と

音更中の川・六の沢遡行図



路ではなく沢から登りたい

北海道には一五〇〇メートルを超える山が一五〇余座あるが、その全座の夏冬両シーズンの登頂を私は二〇一〇年に果たし終えている。三国山も夏と冬に登ってはいたが、夏は登山路からで、何となくしつくり来ていなかった。私は変なこだわりで、夏は

国道から見た三国山の南面





登山路以外の沢や岩稜、岩壁を辿って頂に立つ事を実践してきたのだが、この山ではそれが出来ておらず、ずっと心の隅に引つ掛かっていた。

そんな三国山を二〇一八年の初夏に再訪した。三国トンネルからの夏道経由で、山頂にはヒメシヤクナゲの淡いピンク色の花が満開に広がり、その向こうに表大雪のたおやかな山が灰白色の雲の下に豊富な残雪を光らせて展開しているのは見事な眺めだった。確かに山頂からの眺めは素晴らしいのだが、つい違うところに目が行ってしまう。思い出深い東の

オホーツク分水嶺の山稜は勿論だが、さらに、眼下を埋める十勝三股高原の真つ黒い樹海から這い上がってくる沢にも視線が向いてしまう。じつと見ていると、体の中で眠っていた思いに火が付いたように、力がみなぎりに膨れ上がってくるように感じ、この山は沢からもう一度トライしなければと決意を新たにしたい。

原始の溪相に沢登りの醍醐味

記録によると、南面の音更川の支流である中の川六の沢は、滝が続き面白そうなので、その年の秋に、最

強の助っ人である会友の益田敏彦さんと目指した。はじめは、テントで一泊して酒を酌み交わすプランだったが、お互いに都合がつかず、夏も終わってしまった、このままでは冬になってしまふという心の焦りもあって、お互いなんとか都合をつけて日帰りの強硬実施となった。

九月三日（くもり）。早朝に益田さんの車で札幌をスタート。高速・道東道を音更帯広インターまで利用して国道二七三号に入り北上。上士幌町の十勝三股高原を通過、曇天の中に三国山が大きく円形に盛り上がって聳えている。目指す沢が正面の緑濃い壁に深く刻み込まれているのが見え（前写真）、心が奮い立つ。

そんな眺めの中、上勝北林道の入口に駐車。溪流シューズに履き替え、八時に国道を離れて林道に入る。朝露に濡れた草を踏みしめて進むが、林道はもう利用されていない様子だ。やがて樹林の中に吸い込まれるように入っていくと、十勝川の支流である音更中の川六の沢に出合った。鬱蒼たる樹林の中をサラサラと心地よ



い音をたてて玉砂利の上を流れている。

入渓すると、トドマツ林の中を右へ左へ曲がりくねり、倒木や鹿の足跡も多く、原始を感じる溪相に大雪山の自然の中を辿っているという高揚感にワクワクしてくる。

単調な流れを四五分も辿ると三股の滝が出てきた。この先には小さな滝や岩床、滑滝が断続しており、迸る水流に陽が反射してキラキラ眩しく光る様は明るく、沢登りの醍醐味を感じて遡行も楽しい。滑滝を越えると一〇八〇坪の二股だ。ここは左に進路をとる。すでに樹林帯は抜け出して沢は一層狭まり、切り立ちていく。見上げると、色づきはじめた稜線に白雲が流れて美しく、早く稜線に立ちたい心が逸る。



一〇坪の黒い滝（右写真）を越え、その後も現れる幾つもの滑滝を越えて進むと二五坪の大きい滑滝（写真左）が出てきた。大雪特有の姿で、岩盤を舐めるように流れ落ちる水勢は見事だ。一〇時半で、すぐ先が二二四〇坪の二股。深く切れ込んだ沢の周りは高山の草に覆われ、斜面

にはダケカンバの細い木々が見える。行く手の稜線はすぐ近くになった。振り返ると、辿ってきた沢は灰色のガスに包まれているが、この上空は青空ものぞき、日が当たって暖かい。二股を右に入ると、すぐに二二七〇坪の二股となり、今度は左へ。登るにつれ水は切れて、涸れ沢に変わる。兩岸から笹が被ってきてトンネルとなり、姿勢を低くして潜り抜けるも、そのトンネルもなく、藪に突入となった。二時である。藪は深く、笹と小灌木が密生して行く手を阻む。急斜面の藪を格闘すること二時間、這松が出てきたと思っただけで、線に出た。あとは稜線にある登山路をたどって三国山の頂上に立った。

涙が出るほど有り難い申し出

曇り空で、残念ながら景色は望めなかったが満足である。「沢から」と登り方にこだわってこの山に登ったのだが、滝のある沢で面白く、登りが良かったと納得した。でも体力的にはいっばいいっばいで、この沢を下って車のところに戻るのがちよつと憂鬱な気分だった。

しばらくすると、賑やかに北海道山岳連盟の明田通世さん一行六名が三国トンネルの登山路から上がって来た。旧知の仲であり、愉快に歓談しているうちに、私の心痛を見抜いたかのように「車のカギを貸すから登山路を下って車を回収すれば？」と言ってくれるではないか。私にとっては感謝感激、有難い申し出に飛びついたのは言うまでもない。嬉しすぎて涙が出そう！

さっそく鍵を借り受け一足先に二人で下山。登山路を分岐点ピークに立ち、そこにある「北海道大分水点」と記された丸木の標柱を写真に収めると（写真右下）、一気に走り下り一時間で登山口へ。明田さんの大型ワゴン車で我々の車を回収して登山口に戻ると、ゆつくりと下ってきた明田さんたちがちょうど着いたところだった。感謝の気持ちを入れてカギを返し、層雲峡温泉経由で帰る彼らと別



れる。おかげで時間に余裕が出来たので秘湯・幌加温泉に寄り、野趣いっぱいの露天風呂で汗を流してから札幌に向かうも、その頃から土砂降りの雨となり、登山中は晴れてくれたことを心から喜び、雨中を走行した。

*

分岐点ピークである三国境について付け加えると、国土地理院が「北海道大分水点」として地形図への表記を決めたのは二〇一九年のこと。名付けたのは留辺蘂町の野尻拓己さんで、二〇〇五年に設けた木柱は古くなったので、二〇一九年の秋に北海道森林管理局が石碑を新設している。分水点と称される場所は全国に四か所あるそうだが、国土地理院の地形図に表記されるのは初めてだという。